

『或る女のグリップス』から『或る女』へ

鄭 旭 盛 *

(e-mail : jungsung@nsu.ac.kr)

目 次

- 一、はじめに
 - 二、西垣と浦生の論争及びその他の先行研究
 - 三、『或る女のグリップス』の「中絶」と「完結」をめぐって
 - (1) 蒲生に対する疑問
 - (2) 『グリップス』の根源的なモチーフをめぐって
 - 四、まとめ - 西垣説への疑問をめぐって -
-

1 はじめに

『或る女のグリップス』（以下、『グリップス』とする）の初出は、明治44年1月から大正2年3月までの雑誌『白樺』に連載された作品である。明治44年というと、有島自身が留学から帰国して4年目にあたる時期で、文学者として志した時期でもある。この作品が、6年後の大正8年に改稿・増補を経て『或る女』前篇に、更に後篇の創作を付け加えて、有島武郎の代表作と言われている前・後篇49章の『或る女』に纏められたのである。

しかし、この作品が発表された当時は、山田昭夫氏が言うように読者から「背徳小説」¹⁾として扱われ、多くのファンを失望させたのだが、正宗白鳥氏の高い評価²⁾を機に、この作品に対する注目は一転することになる。それ以後、「本格的なリアリズム」小説³⁾や

* 남서울대학교 일본어과 일본근대문학

1) 山田昭夫『有島武郎』明治書院、明治41年1月15日

2) 正宗白鳥「有島武郎『或る女』」『読売新聞』昭和2年9月19日付

3) 奥野健男「有島武郎『或る女』の早月葉子」『国文学』昭和34年5月

「本格的構成ロマン」小説⁴⁾として、日本近代文学における類のない傑作として評価されてきた。そして、『或る女』の研究は現代に至るまで数多くなされてきたが、その論者の観点は多様である。例えば、トルストイの「アンナ・カレニーナ」、イブセンの「ヘッダ・カブラー」と『或る女』との比較研究⁵⁾、モデル小説として的事实問題⁶⁾、『グリンプス』の主人公と古藤、および有島武郎との私小説的分析⁷⁾、更に〈二元〉思想をめぐる有島武郎の精神史上の解明⁸⁾、あるいはエリスの『性の心理学的研究』と『或る女』との影響問題⁹⁾等のような角度から論じられている。

本稿は、このような研究方法の中から、『グリンプス』の「完結」・「中絶」という文献的問題を踏まえつつ、『グリンプス』の根源的な主題について考察することを目的としている。

2 西垣¹⁰⁾と蒲生¹¹⁾の論争及びその他の先行研究

『グリンプス』と『或る女』の前編との問題、あるいはこの問題の延長線に属する『或

-
- 4) 瀬沼茂樹「或る女-有島武郎-」『日本近代文学・人と作品』読売新聞社、昭和40年12月20日
- 5) これに代表される論文として、小坂晋「『或る女』と『グリンプス』-比較対比研究序論-」（『岩手大学教育学部研究年報』26、昭和41年12月）、上杉省和「『或る女のグリンプス』から『或る女（前編）』へ」（『国語国文研究』41、北海道大学国文学会、昭和43年9月）、安川定男『有島武郎論』（明治書院、昭和42年10月30日）等をあげることが出来る。
- 6) この論点でもっとも有力な論としては、先の注1にあげた山田昭夫の論がある。
- 7) これは本多秋五氏の次の二篇の論文で提唱されたのである。「或る女」（『白樺派の文学』講談社、昭和29年7月）、「私小説にみた『或る女』」（中央公論社版『日本の文学』の『有島武郎・長與善郎の解説』昭和42年4月）
- 8) これは先の注5にあげた上杉省和氏の論が代表的であるが、その他、土方定一「或る女」（『国語国文学』12-10、昭和10年10月）や野島秀勝「人道主義の振幅-有島武郎論-」（『文学界』12-1・2・3、昭和40年1・2・3月）等の論文もある。
- 9) エリスの『性の心理学的研究』と『或る女』との問題は、江頭太助「『或る女』研究の基本問題-『性の心理学的研究』の影響について-」（季刊『文学・語学』11、昭和33年）や青山孝行「葉子の中のエリス-『或る女』の明晰な位置づけのために-」（『国語と国文学』38-9、昭和36年9月）や笹淵友一「『或る女』の主題-有島武郎研究-」（『東京女子大学附属比較研究紀要』17、昭和39年6月）や小坂晋「『或る女のグリンプス』改作の問題点」（『岡山大学教養部紀要』6、昭和45年3月）のほか上杉省和の論などによって論じられている。
- 10) 西垣勤の説は、次の3編にわたって論じられている。それは「『或る女』論-前編の構造について-」（『黄塵』5、昭和43年3月）、「『或る女』補論-『或る女のグリンプス』の成立-」（『黄塵』6、昭和43年8月）、「『或る女』再論-後編について-」（『黄塵』7、昭和44年5月）等の3編であるが、後に『有島武郎論』（有精堂、昭和46年6月10日）に収められる。
- 11) 蒲生芳朗の説は、「『或る女』論序説-前・後編屈折の問題に関する試論-」（『宮城学院女子大学基督教文化研究年報』6・7、昭和47・48年）と「『或る女』論-『或る女のグリンプス』と『或る女』後編の関係-」（『宮城学院女子大学基督教文化研究年報』9・10、昭和51年）である。

『或る女』の前・後編の屈折の問題は、執筆時期に6年という時間の隔たりやその間の有島武郎の精神と生活上の変化をも視野に入れながら、数多く語られてきた。しかし、いまだに『グリンプス』の「完結」・「中絶」問題や屈折問題が明快に論じられていない状況にある。その中で、特に注目し値するのは、後述する西垣氏と浦生氏との間に展開された『グリンプス』から『或る女』への「中絶」・「完結」という観点の論争である。本稿ではそれを中心に考察するが、その前に、この両氏の論争に前後して展開された関連する諸論を視野に入れながら、更に両氏の論争の意義を考えてみる。

まず、西垣氏の論の起点として取り上げておかねばならない本多秋五氏の『「白樺」派の文学』（講談社、昭和29年7月）である。

氏は、〈古藤＝作者〉という私小説的見解の立場を取りながら、前・後編の描き方に注目している。氏は、前篇における作者と主人公の絡み具合がよく分からない故に、彼らが「点景人物」に見えるとするが、後編になると、古藤の人物像が変わることによって、古藤が主人公の全像を浮き上がらせていると言っている。更に氏は、その意味において前編より後編が格段に優れているという前・後編の主題の屈折を唱えながら、後編の優越説を指摘したのである。なお、氏は『或る女』の私小説的見解を強く主張したが、その根拠として『グリンプス』の創作動機が、有島自身の私的体験によるものであったことをここで主張したのである。

次に、山田昭夫氏が「或る女」（『有島武郎』明治書院、昭和41年1月）で、『或る女』をモデル小説としてとらえつつ、有島自身の精神的な変転を鋭く見極めたことは注目し値する。つまり、ここで氏は、モデル小説である『グリンプス』（明治44年頃）の執筆時期と明治34年の私的体験との間に、有島自身の精神的变化—キリストからローファーへ—に、この作品の成立事情があって、そういう意味において、信子にローファー的面影を見ると共に〈叛逆〉の田鶴子を描いた『グリンプス』であるという『グリンプス』それ自体の新たなモチーフへの読みを指摘したのである。更に、安川定男氏は『グリンプス』の成立過程について次のように指摘した。『グリンプス』という作品は、作者自身の内的規制と抑圧を、田鶴子を通すことによって精神的解放を試みた一種のカタルシスの意義を持つ作品であり、また、そのような目的が生んだ作品であると言っている。

このように、『グリンプス』成立事情に関わる注目すべき幾つかの研究を挙げた。そこには、山田・安川氏の見解から窺われるように、有島自身の精神的变化、即ちキリストからローファーへという内的変貌が起因していると言えよう。このような先行研究がある中、西垣氏は本多説を否定しながら、一方では山田・安川氏らの有島の精神的見解を多に受け入れつつ、『グリンプス』の意義を更に明らかにしたのである。では、西垣氏の論を概観する。

〈西垣説〉

西垣氏は、本多氏の私小説的見解に疑問を抱き、『グリンプス』の成立当時と有島自身の私的体験との10年間に見られた精神史—「渡米・背教・無政府主義への接近・帰朝・河野信子との結婚および失敗・神尾安子との結婚・教会退会」—を重視すべきだと言う。そして氏は、このような視点から、『グリンプス』における事実の枠組みは、本多氏がいう私小説的意味を持つのではなく、むしろ「俗物キリスト教徒」に対する作者自身の反逆の機能を担うものとして理解すべきであるとしている。

ここで注目しておきたいのは、山田氏の言う「叛逆」や安川氏が指摘した「作者自身の内的規制と抑圧」といった漠然たる表現から、西垣氏が「俗物キリスト教徒」という「叛逆」対象の具体化を行ったということである。勿論、このような反キリスト的なテーマは、西垣氏によって初めて論ぜられたことではない。既に笹淵友一¹²⁾は「自己解放を求める浪漫的自我の抵抗物としての一般の世俗社会は自我を遠巻きにしている形であった、直接抵抗となっているのは主としてキリスト教である」と指摘し、この作品における中心テーマとして、反キリスト教的な側面を見逃さなかった。

しかし、西垣説は笹淵説の継続ではあるものの、主人公が抵抗するキリスト教というテーマを、「俗物」的な「キリスト教徒」—「信子をとりまく良識の士・森広・矢島楯子・信子など親族のキリスト者」—と、それに「叛逆」する主人公といった構図として捉えたのである。私も、このような西垣説の「俗物キリスト教徒」という「叛逆」対象の具体化には賛成の立場であり、後にこのような見解に立って『グリンプス』をより厳密に検討することにする。

さらに、西垣氏は古藤＝作者の本多説を否定し、田鶴子の挫折・虚無と執筆当時（『グリンプス』を執筆し始めた明治44年頃）の有島の精神状態との共通性を取り上げながら、田鶴子＝作者という見解をここでは強調している。つまり、『グリンプス』は田鶴子が挫折して後、倉地との愛を成立させることによって「自己回復」するヒロインとして描かれた作品と捉えるべきだと言うのである。その結果、『グリンプス』は「一先ずの解放感を得て終わった」という一つの「完結」されたテーマを持つ作品として捉えることが出来ると述べている。

以上のように西垣説を概観したが、〈叛逆〉対象として具体化されたものが「俗物キリスト教徒」であることと、『グリンプス』が「一先ずの解放感を得て終わった」という「完結」した作品として捉えたという二点が注目すべき点であろう。

参考までに、西垣氏が主張する「完結」説と同じ立場に立ち、なおかつ注目すべき他の論として、福田準之輔氏の見解もある¹³⁾。氏は、『グリンプス』を「完結」された作品

12) 笹淵友一「『或る女』の主題-有島武郎研究-」（『東京女子大学付属比較文化研究紀要』17、昭和39年6月）

13) 福田準之輔「『或る女のグリンプス』-その成立について-」（本多秋五・瀬沼茂樹共編『有島武郎研究』

として見ることを前提としながら、『グリンプス』の創作モチーフとして、「二つの道」や「も一度『二つの道』」に見られる二元論の模索として、〈ヘッダ・カブラー〉たる要求が自己における一つの方向を与え、その意欲と抵抗感が同時に『グリンプス』の創作のモチーフであったと述べている。さらに、モデル論的な視点から、田鶴子に対する有島自身の「矛盾」する二面性を指摘した。それは、モラリティとそれに対峙した自己や「聖書と性欲」という二元論的葛藤と苦悩である。有島にとって、それを止揚した一元の世界に生と「自己」の確立を追究することが、『グリンプス』創作の根源的な作者の意図であったと語っているのである。つまり、氏はこの『グリンプス』における意義を、有島自身の一つの理想として捉えていたと言えよう。

以上のように、まず 西垣氏が『グリンプス』という作品をどのように読み取っていたのかを整理してみた。次に、この西垣説に対して反論を提示した蒲生氏の論を見ることにする。

〈蒲生説〉

蒲生氏は西垣氏の『グリンプス』完結説に対し、「破れた懐中鏡」・「下腹の痛み」・田鶴子の「ヒステリー」・『グリンプス』の結末等の場面を挙げながら、これらの事項は後編において破滅を予知させる機能を持っていると指摘した。従って、『グリンプス』は未完で「中絶」された作品であると主張したのである。更に、前・後編の屈折論に関しては、『グリンプス』の結末部をもって既に屈折していると言いながら、『或る女』における前・後編の屈折それ自体を否定し、『或る女』という長編小説をトータルに論ずるべきであるという論を展開したのである。即ち、蒲生氏は、

『或る女』前編（『或る女のグリンプス』）から後編にかけての急激な暗転、愛による再生への期待から愛による破滅の道への鋭い屈折、その屈折を通して描かれた「葉子の廃滅への道筋、愛の絶頂感と墜落感、愛と嫉妬、激情と諦念、現実と妄想の交錯、反復、混迷の生」（西垣氏「或る女」再論）とは、もしかしたら、『或る女のグリンプス』あるいは『或る女』前編から後編への屈折とは、よしんばそれがいかに鋭い屈折を示すにせよ、いわば予定させられた屈折、あるいは「必然的なつながり」によってみちびかれる展開ではなかったのか。そして、もしそうだとしたら、『或る女』前・後編の「モチーフと主題」は「それぞれ」別なもの、あるいはそむきあう志向としてではなく、一つのもの、トータルなものとしてとらえる視点が正しいのではないか。

と、論じたのである。このように、蒲生氏は「前・後編屈折論への否定としての首尾一貫説」という『グリンプス』に対する「中絶」の立場を強調したのである。しかし、蒲生氏の論に対して、西垣氏は次のように反論している¹⁴⁾。

次に挙げられた四点（筆者注一破れた懐中鏡、下腹の痛み、田鶴子のヒステリー症、凶夢）についても、後編は『グリンプス』をふまえ、前編をふまえるのであって見れば、氏のような脈絡を有機的につなぐ考えもあるが、具体的に構想していなくても、ふまえる時に増幅しそれが成功したということに止めておくこともできるのではあるまいか。

以上のように、『グリンプス』に対する「完結」・「中絶」をめぐる両氏の論をみましたが、この両氏の論に対する私なりの見解は後述するとして、この両氏の論争以後の『グリンプス』に対する「完結」・「中絶」に関連する先行研究について、もう少し触れておくことにする。

〈その以後の研究〉

①植栗弥「『或る女のグリンプス』の根源的なモチーフ」（『国文学論集（上智大）』10、昭和52年1月）

植栗氏は、「田鶴子の行動言動が、継統一貫して激情に溢れ愛情と反抗心を強く保持する」とこと「田鶴子の体験と意識の本質が、有島自身の精神的体験と似通うところが多い」という二点に注目し、作品の分析を行った。特に、当時の有島自身の精神的憧憬であったホイットマンとの精神的影響を指摘しながら、倉地のホイットマン近似性から有島と同形の原質に帰る田鶴子を描いていると述べている。つまり氏は、「田鶴子の人生態度変換の歩みは、有島の精神的転回の足どりのヴァリエーションである」と指摘したのである。なお、氏のこのような有島の精神史は、「二つの道」から「惜みなく愛は奪ふ」に至るまでのその精神史をトータルの連続性として捉えながら、『グリンプス』は「中絶」とであると指摘したのである。

②山田俊治「『或る女のグリンプス』論—その変質をめぐる—」（『文芸と批評』昭和53年1月）

「『或る女』前編の改稿問題—葉子の形象について—」（『文学と批評』昭和54年2月）

山田氏は、「イブセン雑感」に示した男女関係における悲劇的な運命に注目しながら、『グリンプス』の第16章にある回想部を考察し、女性の現実におけるリアリティを読むことが出来ると指摘した。つまり、この第16章の「作者の意図」の変質を指摘した上で、『グリンプス』の「中絶」説を述べたのである。そして、こうした男女関係における運命論的観念—「開かれた可能性」ではなく「呪われた女」としての田鶴子—が、改稿された『或る女』では田鶴子から葉子へという着実な変身を成し遂げ、運命的な女性として変貌

14) 西垣勤「『或る女のグリンプス』と『或る女』—蒲生芳朗氏の批判によせて—」（『国文学』昭和52年8月）

したということを指摘したのである。

③外尾登志美「『或る女』の主題「暗い力」」（『日本文学』303、昭和53年9月）

外尾氏は、「老船長の幻影」と同様に、『グリンプス』も破滅を意味する要素をはらんではいないものの、葉子の「暗い力」による行動パターンで示したように、「衝動の世界へ飛びこむ」階段での有島自身の「衝動のままに動くことへの情熱」を読むべきであると指摘した。そしてその意味において、『グリンプス』は「完結」された作品として見る事が出来ると言うのである。（葉子の「暗い力」による行動パターンは外尾氏によれば、衝動を感じる→不完全な覚醒による反発→衝動の世界に飛びこむ→世の中へのふりかえり→徹底的破滅、ということになる。）

④鳥居明久「『或る女のグリンプス』から『或る女』後編へ—古藤をてがかりとして—」

（紅野敏郎編『有島武郎「或る女」を読む』青英舎、昭和55年10月）

鳥居氏は、古藤が「批判の視点」の「転移」に着目した『グリンプス』の「中絶」説である蒲生説に反対しながら、『グリンプス』における古藤は批判者ではなく、観察者の「視点人物」とであると主張したのである。そして氏は、『グリンプス』をモデル小説として「目前の事業」を見るという有島の観察行為がその当初の意図であったと指摘した上で、「『グリンプス』の連載終了は、作品が途中で行き詰まったためのものではなく、作品それ自体がひとつの結局を迎えていたが故のことだと言えよう」と言い、『グリンプス』の「完結」説の立場に立った論を展開している。

⑤江藤茂博「『或る女』成立に関する試論—〈破滅〉への視座をめぐって—」（『武蔵大学人文学会雑誌』昭和59年12月）

江藤氏は、「ヒロインの破滅を描く〈終局〉は、『グリンプス』執筆の段階でほとんど具体的なイメージとして作者の胸中に構想されていた」という蒲生氏の論を否定しながら、破滅に対する認識はあったにしろ、『グリンプス』の段階ではその破滅の構想が具体的にイメージ化されていなかったという当時の有島自身の精神的状態を指摘したのである。つまり、氏は「少なくとも、単に状況に敗北する女性の悲劇を描くということは、『二つの道』を書いた有島には許されていないのである。単なる破滅は、この期の有島の社会認識からすると必然なものではあっても、そこからの脱却こそが彼の希いである自己確立に結びつくからである。『或る女のグリンプス』は文学通り『グリンプス』で終わったのである」という見解なのである。

以上のように、『グリンプス』における「完結」・「中絶」をめぐる諸論を見たが、やはり問題になるのは、有島自身が『グリンプス』を執筆した当時に持っていた原構想は何

であったのか、あるいは『グリンプス』の執筆意図はどこにあったのかという根源的な問題が、この「完結」・「中絶」の問題と深く関連しているようである。従って、『グリンプス』における「完結」・「中絶」の問題は、単にそれらの文献的な考察に止まるのではなく、『或る女』と『グリンプス』とに表現されているそれぞれのモチーフを明らかにすることに通じているように思われる。それを踏まえ、『グリンプス』という作品が、一つの「完結」された作品か、あるいは「中絶」のままで終わった作品かという論争がなされる根源的なモチーフと作者の原構想について、考察を行うことにする。

3 『或る女のグリンプス』の「中絶」と「完結」をめぐって

ここまで、研究史および研究内容を概観してきたが、西垣と蒲生両氏の論争によって活性化された『グリンプス』論は、特にその「完結」・「中絶」をめぐって、依然として明確な究明を得るには至っていない。そのような状況の中で、私としては、それぞれの論点に幾つかの疑問を感じざるをえないため、ここでは両氏の論について私なりの再検討を施し、更に『グリンプス』における「中絶」と「完結」の問題を再考しようとするものである。

既に考察してきたことだが、改めてその論の重要なポイントを挙げると次のようになる。まず、西垣説は「『グリンプス』の終わりは、中絶ではなく、そこに有島は一先ずの解放感を得て終わったと見られるのである」ということであった。これに対して蒲生氏は、前・後編の首尾一貫説を主張しながら、『グリンプス』の終わりは西垣氏が言う一つの作品として「完結」されたものではなく、「中絶」であるととした。この両者の見解に大きな差があるのは、作者の原構想として、有島自身の執筆当初の見通しや『グリンプス』における作者の意図が、どこにあったのかという捉え方の違いによって生じている問題であろう。

そこで、『グリンプス』は作者の原構想として一つの完結された作品として見なすことを可能にするのか、あるいは『或る女』の後編まで有島自身が『グリンプス』を執筆する当初から抱いていた構想であったのかという問題について考察することにする。

(1) 蒲生説に対する疑問

氏は、『グリンプス』における幾つかの要素—破れた懐中鏡・田鶴子のヒステリー症・下腹部の痛み・凶夢・「青白い顔」の少女との出会いの場面・愛子と貞世に対する差別待遇・倉地の犯罪行為の伏線等—を取り上げ、これらの場面が『或る女』の後編の破滅を暗示するものと考えられるのは、作者の意図した描写に他ならない。そのように考えた場合、『グリンプス』は完結された作品ではなく、『グリンプス』の結末が物語っているように、その先には主人公の破滅を描いた『或る女』の後編とつながるのは当然のことであ

る。その意味でも『或る女』の前・後編は屈折されたモチーフで描かれているのではなく、前・後編の首尾一貫した「トータル」な読みを必要とする主張した。

この論は、『グリンプス』において破滅的な暗示を物語るそれらの場面によって支えられているのだが、氏が言うようなこれらの場面は、必ずしも『或る女』後編を必要とすることにはならない気がする。抽象的に表現するならば、もし氏の言う通りであるとすると、その破滅は必ず描かれなければならないはずである。そうでなければ、氏が指摘した破滅を暗示する場面の破滅の暗示という機能そのものは、その意味を失うことになってしまう。

しかし、ここでもう一度蒲生氏が指摘したその暗示的な場面を具体的に取り上げながら、蒲生説に対する私の疑問を述べてみる。まず、愛子と貞世に対する差別待遇についてであるが、氏はこの二人に対して田鶴子が接する待遇の違いから、後編の破滅へつながるとし、その「偏愛ぶり」を指摘した。

田鶴子は自分の寝床を手早くたんで愛子を揺り起すと、愛子は驚いた様に、大きな美しい眼を開けて飛び起きた。田鶴子はいきなり嚴重な調子で、「貴女は明日から私の代りをしないぢやならないんですよ。朝寝なんぞをして居て如何するの。貴女がぐつぐつして居ると貞ちゃんが可愛相ですよ。早く身じまひをして下のお掃除でもなさいまし」とにらめつけた。愛子は羊の様に柔和な眼を眩ゆそうにして、姉を盗み見ながら、衣物を着かへて下に降りて行つた。田鶴子は姉が階子段を降りきつたのを聞きすまして、寝床にいざりよつて羽がひに貞世を軽く抱いた。

この箇所は、氏が指摘した通り、「偏愛ぶり」のように見えなくもない。田鶴子は愛子に対する「嚴重な調子」や「にらめつけ」のような眼付などとはうらはらに、貞世に対して限りのない姉の情を寄せるのである。しかし、次の一文見ると、蒲生氏の論に疑問を抱かないわけにはいかない。それは、「貴方は明日から私の代りをしないぢやならないんですよ」という箇所である。これは一体何を意味するのであろう。思うに、それは愛子が田鶴子の代役をし、いい加減で俗たる親族達から妹達を守る役であった。このような愛子にしてみれば、田鶴子の愛子に対する扱いは、厳しいものであったことも理解し得るが、この『グリンプス』での差別待遇をもって、後編に見られる葉子のヒステリックな破滅への前触れであるという作者の意図した箇所として理解しようとするのは、若干の無理を強いる読みではないだろうか。

更に見ると、氏は後編の破滅として、倉地が外国に日本近海の高図を売る犯罪的なことの伏線として、『グリンプス』の次の箇所を挙げている。

夫れは始終事務所や船医とグループを造つて、小さな卓を囲んでウィスキーをあぶりながら、時々外の船客の話に皮肉な茶々を入れる連中だつた。日本人が着るといかに厭

味に見える亜米理加流の服の仕立方も、さしてさばりにならない程、太平洋を幾度も往来したらしい人達で、どんな職業を持つ人か、さう云ふ事に人一位鋭い田鶴子にすら見当がつかなくつた。田鶴子が這入つて行つても彼等は格別自分の名前を名乗るでもなく、一番気楽な椅子に腰かけて居た男が、それを田鶴子に譲つて、自分は二つに折れるやうに小さくなつて、寝台に曲りこむと、一同は其様子に声を立てて笑つたが、すぐ平気で前の通りに勝手な口をきゝはじめた。夫れでもどの人も事務長には一目置いて居るらしく、又事務長と田鶴子との関係も、事務長からすつかり聞かされて知つて居る様子だつた。田鶴子はさう云ふ間に這入る事を却て気安く思つた。彼等は田鶴子を下級船員の所謂「姉御」扱ひにして居た。

この箇所をもって、蒲生氏は後編における倉地の犯罪行為の伏線として取り上げたが、私としては、既に安川氏によって指摘—「作者としては、倉地の性格、およびこれまでの船員としての経歴からみてもっとも自然にありうべき可能性として、彼を売国奴のスパイという兇状持にまですることを考えついたかもしれない。」—済みのように、後編で倉地を国際スパイとして描いたことについて、やや言い過ぎかもしれないが、当然な感がなくもない。私は、有島が『グリンプス』の執筆の段階で、倉地を国際スパイとして描くことを構想していたのではないと考える。それは、後編における倉地の重み・肉付けの必然性によって、しかも『グリンプス』を踏まえることであった以上、最もそれらしいものとして、国際スパイという職業になったのではないかと思われる。ここでは、たくましくて得体が知れず、しかも悪たる〈男〉の集団を物語っている上に、田鶴子も「さう云ふ間に入る事を却て気安く思つた」というように、『グリンプス』における倉地と田鶴子との結びにおける一つのバリエーションとして読むこともできるのである。

更に、破れた懐中鏡・下腹部の痛み・凶夢・やせた「青白い顔」の少女との出会いの場面等を挙げながら、これらが後編の破滅を暗示し、その伏線的な機能を担うものとして氏は指摘した。それは、氏の指摘の通り、暗い未来の破滅として予知的に機能していることは確かであろう。しかし、だからといって、必ずしも後編の破滅の場面を描かなければならないということではないのではなからうか。つまり、これらの破滅的な予知の描写は、蒲生氏が言う後編の破滅を必要とする伏線的なものではなく、『グリンプス』において、ただ予知的な機能のみを意図して描かれたのではなかったかと思うのである。とすると、この「予知的な機能のみの意図」というのは、一体どのようなことであるのだろうか。あるいは、『グリンプス』におけるこの「予知的な機能のみの意図」というのはどのような意味を持っているのかということについて、項を改めて考察していくことにする。

(2) 『グリンプス』の根源的なモチーフをめぐって

上杉氏は、「『グリンプス』は『二つの道』に述べられている霊肉二元対立のドラマ

に他ならない」¹⁵⁾と前提したあと、「『グリンプス』は霊肉二元の世界であり、『或る女』は霊は去り、肉の次元である」と言い、「この『或る女』の変化はエリスの影響である」とも指摘している。私も、上杉氏が二元から一元への変化であると唱える論に賛同する。特に氏は、倉地の描きに対する変化や主人公と倉地との愛の進行に重点を置いていた。(上杉氏は倉地を肉の世界として想定し、主人公が倉地と結ぶプロセスを霊の世界から脱皮し肉の世界に入るという見解をここで述べている。)しかし、私は他の意味で、上杉氏がいう霊肉二元の世界として『グリンプス』を捉えたいのである。それは、霊肉の裏側に潜むいわゆる霊による「圧迫」と肉による「反発」である。このことについて、次の本文を例に挙げながら考えてみる。

『グリンプス』	『或る女』
A. 木田は熱烈な基督教徒でもなんでもない。田鶴子と同じ平凡な欲望を持った一個の男であるのみならず。	a. 今までおくびにも葉子にみせなかつた女々しい弱点を露骨に現はし始めた。後ろから見た木部は葉子には取り所のない平凡な気の弱い精力の足りないにすぎなかつた。
B. 彼れは名を木村と云つて、最も活動的な基督教徒として知られた男で、	b. その青年は名を木村と云つて、日頃から快活な活動好きな人として知られた男で、
C. かの木田との離婚問題が暴露したので、	c. あの木村との結婚問題が持上ると、

この例の他にも、赤坂ミッションスクールや母への批判等、キリストに対する作者の意図した描写から、内容が反キリスト的に構成されていることが分かる。従って、改作前の『グリンプス』においては、その主旋律として、霊によって「圧迫」するキリストと肉をもって「反抗」する主人公田鶴子を構図化した作品として読むことが可能であろう。この『グリンプス』におけるキリスト教に対するモチーフは、このように確かなものとして窺うことができるし、このキリストの対立構造は、有島自身が『グリンプス』において意図したものでもあったと思う。それは、『グリンプス』の成立過程に、有島自身の精神史—キリスト傾倒からキリスト離れに至るまで—と大きな関わりを持っていると思うからである。(有島とキリスト教との関わりは、既に多くの指摘がなされている¹⁶⁾。実際その関係が、有島の精神史の中で重要であることは、いまさら言うまでもなからう。)

15) 上杉省和「『或る女のグリンプス』から『或る女(前編)』へ」(北海道大学国文学会『国語国文研究』41、昭和43年9月)

16) これについては既に多くの論者によって指摘されてきたのである。例えば、山田昭夫『有島武郎』、安川定男『有島武郎論』の論や笹淵友一、西垣勤、上杉省和等ほとんどの研究に、有島武郎とキリスト教との問題を扱っている。筆者がこの論文に当たって、特に注目したいのは、有島自身の日記(『感想録』)の中に見られる「偽善」の問題である。思うに、当時の有島自身にとって、この「偽善」的な自分のキリスト教観に苦悩された精神的なことが、『或る女のグリンプス』創作の動機と多くかかわりがあるだろうと思うのである。

しかしながら、ここで有島とキリスト教の問題について少し振り返ってみると、まず注目したいのは、有島自身の精神的自伝の性格を持った「『リビングストーン伝』の序」にある次の箇所である。

その時私は始めて宗教的有頂天とも云ふべきものに捕へられた。その有頂天が呼び起す恐るべく緊迫した性欲の発作も亦だ（中略）基督教の説く所のやうでは私にはそれが方便的であるが、中途半端であると思はれない、ここには虚偽がある。さう思つた。

（中略）

私はかうして信仰から離れてしまつたのだ。それからの私は精神的に全く孤独なものとなつた。三十四歳で私は元のえいじになつた。

ここに挙げられた引用からは、有島自身のキリスト教信者としての苦悩の精神的内面をよく窺い知ることができる。つまり、ここでは、キリスト信者として「性欲」（看護婦）や「罪意識」（表裏の違ひ）という〈肉の要求〉に苦しんだことが述べられている。そしてついに、有島自身がキリスト教会から明治43年に脱退するが、この明治43年というのは、『グリンプス』を発表した1年前であった。つまり、当時の有島の精神的な苦悩、即ちキリストによる「圧迫」の苦悩を、『グリンプス』によって作品化したのではなかったのだろうか。より具体的に言えば、『感想録』（有島が日記形式で記録したもの）からも、キリスト教徒である自分自身の偽善性に何より耐えられなかったことは、既によく知られていることである。有島自身が抱いていた当時の精神的苦悩は、内面奥の人間的本能への罪意識とキリスト教徒という外面的偽善性に挟まれ、その脱出口を模索し続けた構図であった。つまり『グリンプス』はそのような意味において、その有島の精神的苦悩の脱出口（カタルシス）としての意義を持つものとして理解することを可能にすると共に、苦悩の脱出の仕方として偽善性の脱皮から罪人へと精神的構図の変貌があったと思われる。そのことが、後の『惜みなく愛は奪ふ』の中でも窺い知ることができるのである¹⁷⁾。

更に、「『リビングストーン伝』の序」で注目しておきたいものは、「飛躍」という言葉が意味する作家有島の意識の問題である。ここでは、有島の祖母がある宗教から離れることになるが、そのことを「眼もくらむやうな飛躍」と言つたのである。この箇所は、『グリンプス』本文から次に挙げる箇所の裏側に潜んでいるある意識を物語っているのではないだろうか。まず、本文を見ることにする。

17) 注16に述べた「偽善」の問題は、日記だけではなく、『惜みなく愛は奪ふ』や『内部生活の現象』、「ホイットマンの一断面」、「草の葉」などにも伺え知ることが出来る。その中で、『惜みなく愛は奪ふ』の一節をあげてみると、次のようである。（「神を知つたと思つていた私は、神を知つたと思つていたことを知つた。私の動乱はそこから芽生えはじめた。或る人は、私を偽善者ではないかと疑つた。どうしてそこに疑ひの余地などがあろう。私は明らかに偽善者だ。明らかに偽善者である。」）

『グリンプス』	『或る女』
D. 田鶴子の心は夫れから峰から峰を飛躍した。	d. 葉子はふと心の眼を開いた。そしてその心はそれ以来峰から峰を飛んだ。
E. 田鶴子は兎に角恐ろしい飛躍の瞬間に臨んだ事を思はない訳には行かなかつた。	e. 葉子は兎に角恐ろしい崖の際まで来てしまった事を、

ここに挙げたDの箇所は、赤坂ミッションスクールでの矛盾たるキリスト教への経験、即ち純粋な少女の心がキリスト教徒達によって無残に破壊された後「飛躍」することを描くことによって、反キリスト的なモチーフを強く醸し出している。そしてEの箇所では、ついに主人公田鶴子が倉地との愛を結んだ直後のことで、それをここでも「飛躍の瞬間」として形容しているのである。つまり、倉地との愛の成立は、霊的キリストからの「圧迫」を断ち切る境地を獲得したことであり、同時に肉の次元の実現でもあるのである。

このように、『グリンプス』を具体的に見ていくと、自分自身の偽善的外面を脱皮するためにも、その対象として偽善的キリスト教徒を「俗物的」（西垣）対象として想定し、そしてそれに反発する〈罪人〉としての田鶴子を描き上げたのである。このような構図とモチーフを持つ『グリンプス』が『或る女』の前篇になると、『グリンプス』が持つ意図がかなり薄れているのである。

何よりも、『グリンプス』を通して有島が獲得した意図は、偽善的キリスト教徒から罪人への精神的な「目もくらむような」「飛躍」的な変貌であったと言えよう。そういう意味において、先の「予知的な機能のみの意味」の本文として理解すべきであったと言ったのである。というのは、偽善的キリスト教徒である自分自身の罪意識から解放されることによって訪れるある漠然とした不安感を、「予知的な機能のみの意図」は十分にテキスト内で担っているし、有島自身、その機能がテキストの内部に設定する必要があったと認識していたのではないだろうか。

そのような意味においても、西垣氏が言う「〈俗物〉キリスト者への攻撃、否定が太い軸として貫かれている」¹⁸⁾という指摘は、これまでの考察から、当を得ていると見ることができよう。さらに西垣氏は、そのような意味で『グリンプス』は、「そこで有島は一先ずの解放感を得て終わった」と述べていた。氏が言う「解放感」という意味自体の不透明さはあるものの、西垣氏が言うこのような結論は、『グリンプス』の結論として妥当であろうか。私としては、西垣説のこの箇所が疑問でならないのである。

18) 注10と同じ。

4 まとめ—西垣説への疑問をめぐって—

既に考察したように、『グリンプス』のモチーフは、キリストとそれを否定し反発する主人公田鶴子を構図化し、有島自身の反キリスト的内面を描いたものであるということがわかった。しかし一方で、反発する田鶴子はどのように描かれていたのか。或いは、キリストに反抗する田鶴子の描き方から、作者有島の意図したものは何であったのかを、更に考えることにする。

既に多くの論者によって指摘されてきたことであるが、それらの論点は田鶴子が有島自身の精神的分身として理解されてきた。この有島の精神的分身たる田鶴子に対して、山田昭夫氏は「〈叛逆〉への昇華」¹⁹⁾された田鶴子と見なし、その原動力としてローファー的思想のはたらきを指摘した。同じ見解として西垣氏も「〈叛逆〉の田鶴子に昇華」することによって、その反動として信子の親族などのキリスト者を「〈俗物〉キリスト者」²⁰⁾として形象することに他ならなかったと言う。更に、上杉氏も「田鶴子は光栄ある叛逆者ヘッダ」²¹⁾であると指摘した。これらで述べられているように、有島自身が『グリンプス』を執筆するにあたっては、その主人公たる田鶴子に対する共感を持っていたと見るべきだろう。それは、田鶴子を通して有島自身の当時のキリスト教への懐疑を見事に描き出したことから、田鶴子は有島自身の分身であると言ってよいと思う。しかし、果たして『グリンプス』における田鶴子は、その指摘のように昇華された存在あるいは光栄ある存在として描かれていたのだろうか。それについて、次の本文を取り上げながら考えてみたいと思う。

『グリンプス』	『或る女』
F. 勝利者らしい真面目臭った顔付をして、悪むべき魔女をみよと身のまわりの人達にをめき叫んで居た。	f. 小さく見える遠くの方から、憐れむやうなさげすむやうな顔付きをして葉子の姿を眺めてゐた。
G. 田鶴子は墜落するかも知れませんが仰つて下さいませ。	g. 葉子はどんな人間になり下るかも知れませんが仰つて。
H. 田鶴子はかうして思はず眼をたじろがす度に事務長に対して不思議な悪しみを覚えると共に、もう一度其悪むべき眼を見すゑて其中に潜む不思議をよく見きわめたい心になつた。	h. 葉子はかうして思はず眸をたじろがす度毎に事務長に対して不思議な憎しみを覚えると共に、もう一度その憎むべき眼を見すゑてその中に潜む不思議を存分に見極めてやりたい心になつた。
I. 初めて大罪でも犯そうとする人のやうに夢中になつて、	

19) 注1と同じ。

20) 西垣勤「『或る女』論-前編の構造について-」（『黄塵』5、昭和43年3月）

21) 注15と同じ。

J. 魔のやうな好奇心を似て待ち設けて居たが、	j. 心ばかりでなく、肉対的な好奇心を似て待ち受けていたのだつたが、
K. 唯眼の前の罪の淵に浮ぶばかりなる……	k. 唯眼の前の恥ずかしき思ひに漂ふばかりなる……

これらの記述、即ち「魔」「墜落」「悪」「罪」等の言葉は、「昇華」された田鶴子として或いは「光栄」ある田鶴子として理解することが出来るだろうか。『グリンプス』における田鶴子は、決して「昇華」や「光栄」といった言葉で表せる人物として形容されていたわけではなく、相善的・相聖的な人物として理解するべきである。それに、このような人物形容にこそ、有島の『グリンプス』に対する反キリスト教という意図による倫理的—宗教的倫理—反動として、しかもそれを歪曲する（キリスト教そのものに歪曲）ことなく受け止めようとした有島の姿勢を読み取るべきではないだろうか。有島は『グリンプス』の本文の中で、次のような非常に意味深い言葉を用いている。それは、「田鶴子は生来こんな惨い、いまはしい思ひに悩んだ事はなかつた。」という箇所「いまはしい」という言葉であるが、改作後には「真暗な」と表されている。つまり、『グリンプス』において有島に迫ってくる現実—キリスト教に対する反発によって訪れる—の「罪」意識は、反抗する田鶴子を通してキリスト教から完全に解放されたと言い得ないのであろう。換言すると、『グリンプス』の段階では、有島自身に対して西垣氏が言うような「一先ずの開放感を得て終わった」ではやや無理がある。どちらかという、『グリンプス』は開放感を得たのではなく、「いまはしい」という言葉が象徴するように、『グリンプス』執筆当時に抱えていた有島自身の精神的苦悩—キリスト教に対する苦悩—を完全に振り切ったとは言えないと思うのである。

そのような意味において、蒲生氏が指摘した『グリンプス』における破滅的な伏線を意味する場面は、「いまはしい」『グリンプス』執筆時期の有島の内面を端的に物語るものとして、ただ予知的機能にすぎなかったというテキスト上の機能的な読みも十分に可能にするのではないだろうか。

結論的に、『グリンプス』は、有島が当時抱いていたキリスト教に対する精神的苦悩を、主人公である田鶴子を通すことによって「叛逆」として描きつつ、一方では有島自身がその「叛逆」によって求道されることなく、「いまはしい」気分に含まれていた精神の内面を、率直に表した作品として理解すべきではないかと思われるのである。

【参考文献】

- ・ 本多秋五 (1954) 『「白樺」派の文学』、講談社
- ・ 瀬沼茂樹 (1965) 『日本近代文学・人と作品』、読売新聞社
- ・ 野島秀勝 (1965) 「人道主義の振幅—有島武郎論—」、『文学界』12-1・2・3
- ・ 山田昭夫 (1966) 『有島武郎』、明治書院
- ・ 安川定男 (1967) 『有島武郎論』、明治書院
- ・ 上杉省和 (1968) 「『或る女のグリンプス』から『或る女（前編）』へ」、北海道大学国文学会『国語国文研究』
- ・ 西垣 勤 (1971) 『有島武郎論』、有精堂
- ・ 蒲生芳郎 (1972~1973) 「『或る女』論序説—前・後編屈折の問題に対する試論—」、
『宮城学院女子大学基督教文化研究年報』6・7
- (1976) 「『或る女』論—『或る女のグリンプス』と『或る女』後編の関係—」、
『宮城学院女子大学基督教文化研究年報』9・10

要 旨

本稿で、『或る女のグリンプス』の「完結」・「中絶」という文献的問題を踏まえつつ、『或る女のグリンプス』の根源的な主題について考察した。特に、西垣勤の論と蒲生芳郎の論との両氏の説に注目しながら、それぞれの論点の是非について論じながら、新たに『或る女のグリンプス』の読みを提示したのである。

まず、蒲生芳郎は、『グリンプス』における幾つかの要素—破れた懐中鏡・田鶴子のヒステリー症・下腹部の痛み・凶夢・「青白い顔」の少女との出会いの場面・愛子と貞世に対する差別待遇・倉地の犯罪行為の伏線等—を取り上げ、これらの場面が『或る女』の後編の破滅を暗示するものと考えられるのは、作者の意図した描写に他ならない。そのように考えた場合、『グリンプス』は完結された作品ではなく、『グリンプス』の結末が物語っているように、その先には主人公の破滅を描いた『或る女』の後編とつながるのは当然のことである。その意味でも『或る女』の前・後編は屈折されたモチーフで描かれているのではなく、前・後編の首尾一貫した「トータル」な読みを必要とする主張した。しかし、だからといって、必ずしも後編の破滅の場面を描かなければならないということではないのではなかろうか。つまり、これらの破滅的な予知の描写は、蒲生氏が言う後編の破滅を必要とする伏線的なものではなく、『グリンプス』において、ただ予知的な機能のみを意図して描かれたのではなかったかと本稿では、論じられているのである。

それから、『グリンプス』の段階では、西垣勤がいうように、「一先ずの開放感を得て終わった」ではやや無理があるみるのである。どちらかという、『グリンプス』は開放感を得たのではなく、本論で考察した「いまはしい」という言葉が象徴するように、『グリンプス』執筆当時に抱えていた有島自身の精神的苦悩—キリスト教に対する苦悩—を完全に振り切ったとは言えないと思うことを本稿では、主張されているのである。

キーワード： 完結説、中絶説、予知的な機能、飛躍、いまわしい

투 고 : 2009. 5. 31

1차 심사 : 2009. 6. 13

2차 심사 : 2009. 6. 27